

大田南畝

一話一言 6 (卷四十～卷四十八)

別卷 6

日本隨筆大成

吉川弘文館

日本随筆大成 別巻

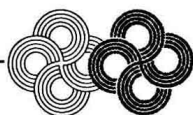
昭和三年四月十日発行

編纂者 日本随筆大成編輯部

代表 早川純三郎

発行者 桜井庄吉

発行所 日本随筆大成刊行会



日本随筆大成 別巻

一話一言 6

昭和五十三年十二月二十五日 印刷

昭和五十四年一月五日 発行

編者 日本随筆大成編輯部

発行者 吉川圭三

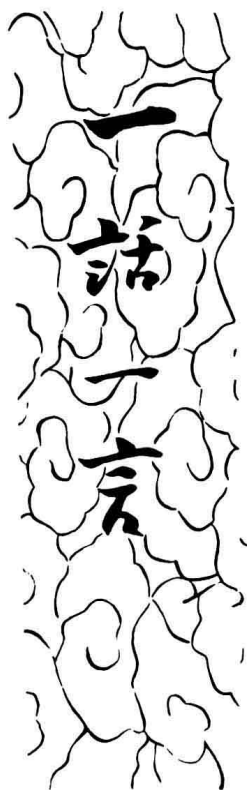
発行所 株式会社 吉川弘文館

〒113 東京都文京区本郷七丁目二番八号

電話東京八一三一九一五（代表）

振替口座東京〇一二四四番

製作 株式会社 たんちょう社



目次

○卷四十

凹凸窠	二	日本詩紀引書	三〇
宋詩二陳	二	佐々軍記二条	三
虚訳伝記	三	平泉実記	三
武徳鎌倉旧記	三	山家義苑	三
堤氏藏書目録	三	易纂言	三
犬追物記	七	二十二史文抄	三
天台教	六	同明史文抄の中利瑪竇が事	三
青木昆陽著述目録	六	甘藷	三
祝允明桜詩	九	清国地志の事	三
澹居藁詩	九	戸田茂睡翁歌	三
売レ廟	二〇	法華経唐本	三
遍照院前大僧正頼印行状絵詞抄書	三	酒顛童子像	三
以上原卷五十三		卷末に文政二年己卯猪日より同仲秋十日に終る此日宿雨新晴七十一翁杏花園とあり	
娶婦以茶	三	蕉窓漫筆	三
阿弥陀経脱字	三	幻住菴清規抄書	三

都賀六蔵

四 神田旅籠町名主中村氏書留抄書

四

○卷四十一

五朝小説二条

五 随菴諧語抄書

三

唐翁承賛詩

五 延山日潮上人書

六

狸塚

五 序江漢先生死生

七

槐記抄書

五 牛込行元寺復讎の碑

八

石斛

五 白賁墅芳宜園の事

九

対雪家稿抄

八 聚頭俗韻

九

烟酒

三 白石手書五条写

九

以上原卷五十四
卷末に文政二年己卯仲秋十八日起筆三年庚辰竹醉日にいたる七十二翁杏花園とあり

○卷四十二

皇帝勅諭日本国王源道義書

五 濃茶薄茶之式

一四

鄭成功書簡

七 露地の草履

一〇

寿蔵

一〇 江戸金石雜誌

一〇

安土山記

一〇 芝愛宕山毘沙門天使者の式

一四

煙笛銘

一〇 江府十組諸問屋

一六

煙戒

一〇 宮城野忍報讎の実説

一〇

草履打の実説

二三

黄朝顔の事

二三

以上原卷五十五 卷末に文政三年庚辰孟夏收拾故紙以為一卷七十二翁とあり

○卷四十三

貝原元端同篤信書簡写

二三

記夢

一五

梅雨

一七

邪流起本

一五

東海道駅名古所称

二三

梁田才右衛門花押

一五

庚辰九月阿蘭陀俄狂言

一三

片猷詩

一五

洛陽本性寺沙門了意著書目録

一四

唐高駢 康駢

一五

板倉周防守判の古文書写

一四

大治古写経

一五

続群書類従合戦部目録

一五

一本菊

一五

尚書大伝序

一五

題野泊図

一五

楊大年祭皇后文

一五

川傍柳三編序

一五

高尾発句

一五

長崎土産

一五

新吉原九郎助稻荷奉納一卷

一五

以上原卷五十六 卷末に年なし

右五十六卷は翁の年ごろ書あ

つめおかれたる原本なり。そ

の中にて卷の一、卷の二、卷

の三、卷の八、卷の三十三、

卷の四十は欠たり。卷ごとの

末に纂輯の年月を記したると

記さぶるとの差ありて五十六
にはなし、されど其巻の末つ
かたにのせたる長崎土産のは
しがきに文政三年庚辰のとし

文月廿八日とあるは翁の世を
去りし三とせ前にあたりたれ
ば、此あたりにて筆をとどめ
られしものなるべし。

○卷四十四

古来俠者姓名小伝

一七

心学の事

二二

薩州隅州の海中に在之桜島神火の次第

一八

熊坂氏恤民書付

二二

難船紀聞

一六

小野篁作の閻魔

二六

房州漂着大清人稟

一五

俵の字

二九

天明三年卯七月浅間山焼拔候一件

一五

鱗形屋画双紙作者

二九

集千家註批点杜工部詩集

一九

両国橋向築出

二九

加州仰西寺尼詩歌

二〇

二百里

二九

北 向

二〇

かくれたるしん

二〇

大坂追手焼失書付

二〇

樹上覆裏

二〇

○卷四十五

徂徠詩

三二

三州志

三三

梅の風

三三

羅念庵文集抄

三三

野州阿蘇郡佐野郷時平大明神

萩 寺

仙台釘子村百姓敵を被討に参り候実記

襲代の事

文政壬午正月日暈図説

野翁物語抄三条

禁裏万歳之御式

朝鮮試官契会図写

大仏古文書

縁山三大蔵経縁起

寛文年中当世はやり物

奇 疾

萩をめづる詞

戲子市川団之助書置写

四方真顔長歌

日本一阿房鑑

一言奇談

河童図説

唐唐春

三四

三四

三五

三六

三〇

三六

三六

三三

三三

三三

三四

三三

三七

三六

三六

二四

二四

二六

二五

敬器之図

万葉遺漏

二五

二五

右古来俠者姓名小伝より樹上覆裏まで
の一卷、徂徠詩より万葉遺漏までの一
巻、合せて二巻は永井脩平ぬしの近き
頃市にあさりて得られたるものなりと
て緒方重三郎ぬしの紹介して集成館に
かしておこされぬ。おのれよろこびにた
へず披き見るに、その一卷は一話一言
巻といふ文字までを存して巻数の文字
を破りとりたるあとあるは奸商のしわ
ぎなるべし。その巻末に翁の筆もて天
明五六年の比とあるをもて推せば巻の
八の佚存せしものとおぼゆ。そは巻の
七の末に天明四五年の比集むとあり、
巻の九の末に天明七年八月より云々と
あるをもて知れるなり。又の一卷は一
話一言巻とばかりありてその数はしる
さず、そが中に載せたる萩をめづる詞

の末に辛未九月二日杏園とあるを見れば文化八年の頃なるべし。然らば巻の三十三にあつべきものか。そはとまれ

かくまれ二巻とも翁の自筆にまぎれなければこゝに収めていさゝかそのゆゑよしをしるす。

○卷四十六

東武百景詩

二七〇

御材木石奉行支配穴太頭二人由緒書

二七〇

松岡清介答人之問書

二七四

道富丈吉由緒書

二八一

三味線来由并沢の苗字附事

二七六

空也僧鉢敲考

二八四

○卷四十七

鶴岡山炎上事記

二九一

鎧巧明珍家譜并巧拙之評

二九四

小松弥助由緒書

二九七

華夷一覽図説

三〇〇

○卷四十八

吉川家由緒書

三五五

蕉翁書簡

三五六

村庵小藁

三五六

蝦夷の風俗

三六〇

偽年号考

三六六

比丘尼惣頭

三六八

浦井伝蔵へ申渡の事

三六九

清少納言の塚 附猿の歌

三六九

浅野家臣遺族の事

三六九

壬生忠見幼童の時の歌

三七〇

下わらび抄	三五〇
白氣立	三五四
横田甚五郎八木兵助喧嘩	三五四
両頭亀	三五四
盜賊の歌	三五四
奥州赤鼠	三五四
奥州の海紅になる事	三五四
神道者吉川惟足が事	三五四
小倉山莊の色紙	三五四
江戸中辻番町々木戸	三五四
東照宮の奉号	三五四
町人刀を帶する事御制禁	三五四
馬場先御門新橋を懸	三五四

一季居奉公人三月五日定	三五六
弘文院御加増	三五六
天子御称号読方	三五六
四書の国人の字読方	三五六
龜山敵討の事	三五六
有馬侯縁談書付	三五六
半井卜養事蹟	三五六
右東武百景詩より以下の三卷は一話一 言の名をおはせて転写本の伝はりたる ものにして、おのれいまだその原本を 見ねば真偽のほど定めがたけれど、併 せてこゝに収めおきて後の考をまつ。	三五六
癸未九月	三五六
南洋しるす	三五六

大田南畝先生纂著

大田 堅

島崎 栄 貞

同校

○凹凸窠

楊升菴文集^{六十卷}云、画記云、張僧繇画^三一乘寺壁、遠望如^三凹凸、近以則平、名曰^三凹凸花。俗呼^三一乘寺^二為^三凹凸寺^二云。

按石川丈山、一乘寺村に詩仙堂を建、居る所を名づけて凹凸窠といふ。その居る所の形によるとはいへど、実は一乘寺を名づけて凹凸寺といふに本づけるなるべし。

○宋詩二陳

宋詩に二陳あり、一は陳師道、字は無己、后山と号す。一は陳与義、字は去非、簡齋と号す。明の胡元瑞詩藪に曰、宋之学^レ杜者、無^レ出^三二陳^一。師道得^三杜骨^一、与義得^三杜肉^一。無己瘦而勁、去非贍而雄、后山多用^三杜虛字^一、簡齋多用^三杜實字^一。

宋王偁東都事略^{卷一百十六}云、陳師道字無己、徐州彭城人也。少刻苦問^レ学、以^レ文謁^三曾鞏^一。鞏奇^レ之。元祐中、蘇軾傳堯愈孫覺薦^三于朝^一、為^三徐州教授^一、除^三大学博士^一。初師道在^レ官、嘗私至^三南京^一謁^三蘇軾^一、至^レ是言者彈^三其冒^レ法越^レ境^一、出為^三潁州教授^一。紹聖初、言者復論^三師道進^レ非^三科策^一。罷歸。久^レ之為^三棣州教授^一、除^三

秘書省正字、以卒。師道家素質、自罷歸彭城、或累日不炊、妻子慍見不恤也。諸經皆有訓伝、於詩礼尤選。為文師曾鞏、為詩宗黃庭堅。然平淡雅奧、自成一家云。

明錢抑之南宋書卷六十三云、陳与義、字去非、洛人、上舍甲科、歷太學博士。高宗南遷、避亂襄漢、轉湖湘、

踰嶺嶠。紹興中、累官翰林學士知制誥、至參知政事、予祠卒。容狀儼恪、不妄言笑、薦士于朝、退未嘗以語人。長于詩、体物寓興、清邃紆余、上陶謝韋柳間、自号簡齋居士。有無住詞一卷。

〔頭註〕劉須溪先生評点簡齋詩集卷之十五、無住詞十八首。増注、無住者、湖州青墩鎮僧舍之菴名也。

公紹興間奉祠寓居焉、卷中詩詞皆可考、而詞亦多其時所作。故以題集、金剛經心無所住而生其心、菴名本此。」

明焦弱侯国史経籍志卷五

陳師道集十四卷 又外集六卷 又理究一卷 又長短句二卷

陳与義簡齋集二十卷

秘書 鈴木白藤より文通に

陳后山詩註十二卷 朝鮮板 五冊 門人彭城陳魏衍序

元城王雲題

后山詩集目錄年譜附

天杜任淵

跋に弘治丁巳秋九月朔石涼楊一清識

右は珍奇之書之由、楓山にても別庫に相貯へ、大切にいたし置候品にて御座候。正月幾望

○虚訳伝記

虚訳伝記国字解 三卷 山本守秀解注

寛政七年卯十一月 皇都書林

鉄屋町松原下ル町
升屋庄兵衛
寺町松原下ル町
梅村忠兵衛 板

是は虚無僧ノ家ニ伝ル俗書ナルベシ、普化禪師ノ伝ナドアリ。

○武徳鎌倉旧記

鎌倉繁栄広記第一之卷

武徳鎌倉旧記
後編第十三ヨリ第廿四ニ至ル

延享二年丑正月吉日

京ふや町通せいぐわんじ下ル町八文字屋八左衛門板也。

と題せるもの十二卷、延享二乙丑青陽上旬作者八文字自笑が序ありて、歴代の軍書にもれたる事どもを拾ひ纂め、全部十二卷に編て鎌倉繁栄広記と号、世に弘め畢とあれども、自笑などが作るべきものにあらず、実朝卿一代の事を記せり、是は其書に記せる武徳鎌倉旧記と云へるものゝ後編にして、かゝる一種の偽書なるべし。己卯閏四月小尽清晨

○堤氏蔵書目録

有親君御願文伝記

徳川世記

御十代考 大久保忠寄

岩淵夜話別集上下 大道寺友山

○成憲摘要上下 丸山可澄

○参州一向宗乱記

三方原合戦記

林鍾談二 岡田幸右衛門

○板坂卜斎覚書

○大坂陣覚書 山口久庵

北川次郎兵衛覚書

○秀頼公籠城記

文廟御伝略 篠山吉之助

御三家忌辰記 源朝風

千年山 朝風

御三卿譜三 朝風

豐太閤朝鮮軍令

○朝鮮南大門合戰記 天野源右衛門

大正寺淺井聯合戰記

○小松物語

浮田秀家記

井伊家記

黒田記

○依田記

松平十郎左衛門記 源忠勝

水野左近武功覚書

淺川伝右衛門聞書三

庵女談

安藤帶刀物語覚書

堀直寄記

老蟹談

御忌辰記 源朝風

諡号雜記

福井鑑上下

吉利支丹由来記

豐太閤遺物帳

大和軍記

○村井勘十郎覚書

○武田勝頼滅亡記 尼理慶

○藤堂高虎記

鳥居家記

片桐記

那須記

本多利長家覚書

烈公遺事 湯淺元禎

聞見集二 石川新兵衛

故諺記

水野隼人正覚書

翁物語二 小早川能久

講習余録 淺見安正